

# 2024年 東京科学大学本番レベル模試・数学

## 解答・解説・採点基準

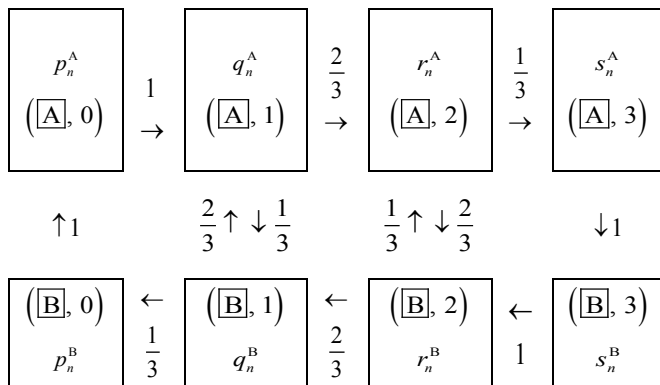
全5問 180分 300点満点

I (60点)

### 【解答・採点基準】

※特に記載がない限り，導出過程と結論の両方が正しい場合にその配点要素を加点する

1回の操作による状態の遷移とその確率を示すと以下のようになる。  
ただし  $(\boxed{X}, S)$  は操作後に文字カードの表が  $\boxed{X} \in \{\boxed{A}, \boxed{B}\}$  で，数字カードの表の数の和が  $S \in \{0, 1, 2, 3\}$  となる状態を表す。



(1)

$n=0$  の場合の確率は形式的に，

$$(p_0^A, q_0^A, r_0^A, s_0^A, p_0^B, q_0^B, r_0^B, s_0^B) = (1, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0)$$

と定義できる。これと上の遷移図をもとに計算を進めると，

$$(p_1^A, q_1^A, r_1^A, s_1^A, p_1^B, q_1^B, r_1^B, s_1^B) = (0, 1, 0, 0, 0, 0, 0, 0)$$

$$(p_2^A, q_2^A, r_2^A, s_2^A, p_2^B, q_2^B, r_2^B, s_2^B) = \left(0, 0, \frac{2}{3}, 0, 0, \frac{1}{3}, 0, 0\right)$$

$$(p_3^A, q_3^A, r_3^A, s_3^A, p_3^B, q_3^B, r_3^B, s_3^B) = \left(0, \frac{2}{9}, 0, \frac{2}{9}, \frac{1}{9}, 0, \frac{4}{9}, 0\right)$$

となる。ゆえに0より大きいものは

(I) 10点(A)

$$q_1^A = 1, r_2^A = \frac{2}{3}, q_2^B = \frac{1}{3}, q_3^A = \frac{2}{9}, s_3^A = \frac{2}{9}, p_3^B = \frac{1}{9}, r_3^B = \frac{4}{9}$$

である。

$$(答) q_1^A = 1, r_2^A = \frac{2}{3}, q_2^B = \frac{1}{3}, q_3^A = \frac{2}{9}, s_3^A = \frac{2}{9}, p_3^B = \frac{1}{9}, r_3^B = \frac{4}{9} \quad (A)$$

(2)

求める確率は  $T_n = q_n^A + q_n^B + r_n^A + r_n^B$  である。上の遷移図より、以下の漸化式が成立する。

$$\begin{cases} p_{n+1}^A &= & p_n^B \\ p_{n+1}^B &= & \frac{1}{3}q_n^B \\ q_{n+1}^A &= & p_n^A + \frac{2}{3}q_n^B \\ q_{n+1}^B &= & \frac{1}{3}q_n^A + \frac{2}{3}r_n^B \\ r_{n+1}^A &= & \frac{2}{3}q_n^A + \frac{1}{3}r_n^B \\ r_{n+1}^B &= & \frac{2}{3}r_n^A + s_n^B \\ s_{n+1}^A &= & \frac{1}{3}r_n^A \\ s_{n+1}^B &= & s_n^A \end{cases}$$

$$(A) \quad \dots \textcircled{1}$$

①の1行目と2行目の式から  $p_n^B$  を消去して

$$p_{n+2}^A = \frac{1}{3}q_n^B \quad \dots \textcircled{2}$$

を得る。①の7行目と8行目の式から  $s_n^A$  を消去して

$$s_{n+2}^B = \frac{1}{3}r_n^A \quad \dots \textcircled{3}$$

を得る。②, ③をそれぞれ, ①の3行目, 6行目に代入し,  $p_n^A, s_n^B$  を消去すると, ①の4行目, 5行目と合わせて

$$\begin{cases} q_{n+3}^A = \frac{1}{3}q_n^B + \frac{2}{3}q_{n+2}^B \\ q_{n+1}^B = \frac{1}{3}q_n^A + \frac{2}{3}r_n^B \\ r_{n+1}^A = \frac{2}{3}q_n^A + \frac{1}{3}r_n^B \\ r_{n+3}^B = \frac{2}{3}r_{n+2}^A + \frac{1}{3}r_n^A \end{cases} \quad (B) \quad \dots \textcircled{4}$$

となる。よって, ④の2行目+3行目より

$$q_{n+1}^B + r_{n+1}^A = q_n^A + r_n^B \quad \dots \textcircled{5}$$

が成り立つ。④の1行目+4行目より

(A) 答・・・10点

- 誤り1つにつき5点減点

(2) 50点(A)(B)(C)(D)(E)(F)(G)

(A)  $n \rightarrow n+1$  の遷移図に基づいた確率漸化式を立式する・・・10点

(B) 変数消去により, 8元から4元の連立漸化式に縮約する・・・5点

$$q_{n+3}^A + r_{n+3}^B = \frac{2}{3}(q_{n+2}^B + r_{n+2}^A) + \frac{1}{3}(q_n^B + r_n^A)$$

...⑥

が成り立つ。ここで、新たに

$$\begin{cases} a_n = q_n^B + r_n^A \\ b_n = q_n^A + r_n^B \end{cases} \quad (C)$$

とおくと、 $T_n = a_n + b_n$  で与えられる。さらに、⑤、⑥より

$$\begin{cases} a_{n+1} = b_n \\ b_{n+3} = \frac{2}{3}a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} a_{n+1} = b_n \\ a_{n+4} = \frac{2}{3}a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n \end{cases} \quad (D)$$

となる。三項間漸化式を解くために、まず初期状態を求める。形式的に  $n=0$  を操作を始める前の状態として定めれば、(1)の結果より

$$\begin{cases} (a_0, b_0) = (0, 0) \\ (a_1, b_1) = (0, 1) \\ (a_2, b_2) = (1, 0) \\ (a_3, b_3) = \left(0, \frac{2}{3}\right) \end{cases} \quad (E)$$

が得られる。次に、三項間漸化式を変形して

$$a_{n+4} = \frac{2}{3}a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n \Leftrightarrow a_{n+4} + \frac{1}{3}a_{n+2} = a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n$$

を得る。よって、数列  $\left\{a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n\right\}$  は定数数列 (F 1/2) であり、初項の偶奇性に注意して

$$\therefore a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n = \begin{cases} 1 & (n=0, 2, 4, \dots) \\ 0 & (n=1, 3, 5, \dots) \end{cases} \quad \dots \textcircled{7}$$

が得られる。また、

$$a_{n+4} = \frac{2}{3}a_{n+2} + \frac{1}{3}a_n \Leftrightarrow a_{n+4} - a_{n+2} = -\frac{1}{3}(a_{n+2} - a_n)$$

から、数列  $\{a_{n+2} - a_n\}$  は公比  $-\frac{1}{3}$  の等比数列 (F 2/2) であり、初項の偶奇性に注意して

$$\therefore a_{n+2} - a_n = \begin{cases} \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n}{2}} & (n=0, 2, 4, \dots) \\ 0 & (n=1, 3, 5, \dots) \end{cases} \quad \dots \textcircled{8}$$

も得られる。⑦、⑧より

(C) 変数  $\begin{matrix} a_n = q_n^B + r_n^A \\ b_n = q_n^A + r_n^B \end{matrix}$  に着目...5点

(完答)

(D) 三項間漸化式に帰着...5点

(E) 三項間漸化式を解くために必要な初期状態を全て求める...5点

(完答)

(F) 三項間漸化式の特徴方程式の

解  $\alpha^2 = \frac{2}{3}\alpha + \frac{1}{3} \Leftrightarrow \alpha = 1, -\frac{1}{3}$  に注目

した式変形...10点(各5点×2)

- ⑦式のみを導いて(5点)から連立二項間漸化式に帰着(5点)させてもよい。

- ⑧式のみを導いて(5点)から、階差数列に帰着(5点)させてもよい。

- どの場合も結果ではなく、方針に加点する。(加点要素(E)に起因する間違いは無視する)

$$a_n = \begin{cases} \frac{3}{4} \left\{ 1 - \left( -\frac{1}{3} \right)^{\frac{n}{2}} \right\} & (n=0, 2, 4, \dots) \\ 0 & (n=1, 3, 5, \dots) \end{cases}$$

を得る。また、 $a_{n+1} = b_n$  から

$$b_n = \begin{cases} 0 & (n=0, 2, 4, \dots) \\ \frac{3}{4} \left\{ 1 - \left( -\frac{1}{3} \right)^{\frac{n+1}{2}} \right\} & (n=1, 3, 5, \dots) \end{cases}$$

も得られる。以上より、求める確率は

$$T_n = a_n + b_n = \begin{cases} \frac{3}{4} \left\{ 1 - \left( -\frac{1}{3} \right)^{\frac{n}{2}} \right\} & (n=2, 4, 6, \dots) \\ \frac{3}{4} \left\{ 1 - \left( -\frac{1}{3} \right)^{\frac{n+1}{2}} \right\} & (n=1, 3, 5, \dots) \end{cases}$$

となる。

$$(\text{答}) T_n = \begin{cases} \frac{3}{4} \left\{ 1 - \left( -\frac{1}{3} \right)^{\frac{n}{2}} \right\} & (n=2, 4, 6, \dots) \text{ (G 1/2)} \\ \frac{3}{4} \left\{ 1 - \left( -\frac{1}{3} \right)^{\frac{n+1}{2}} \right\} & (n=1, 3, 5, \dots) \text{ (G 2/2)} \end{cases}$$

(G) 答・・・10点(各5点×2)

(2)[別解] 50点

(H)(AI)(I)(C)(J)(K)(G)

(H)  $n \rightarrow n+2$  の遷移に着目する  
方針・・・5点

(AI)  $n \rightarrow n+2$  の遷移図に基づいた確率漸化式を立式する・・・10点

- 本解の加点要素(A)か、別解の(AI)どちらか一方のみ加点する。

(2)[別解]

操作2回おきの状態の遷移を考える(H)と以下の漸化式が成立する。

$$\begin{cases} p_{n+2}^A = & & & \frac{1}{3}q_n^B \\ p_{n+2}^B = & & \frac{1}{9}q_n^A & + \frac{2}{9}r_n^B \\ q_{n+2}^A = & p_n^B & + \frac{2}{9}q_n^A & + \frac{4}{9}r_n^B \\ q_{n+2}^B = & \frac{1}{3}p_n^A & + \frac{2}{9}q_n^B & + \frac{4}{9}r_n^A & + \frac{2}{3}s_n^B \\ r_{n+2}^A = & \frac{2}{3}p_n^A & + \frac{4}{9}q_n^B & + \frac{2}{9}r_n^A & + \frac{1}{3}s_n^B \\ r_{n+2}^B = & & \frac{4}{9}q_n^A & + \frac{2}{9}r_n^B & + s_n^A \\ s_{n+2}^A = & & \frac{2}{9}q_n^A & + \frac{1}{9}r_n^B \\ s_{n+2}^B = & & & \frac{1}{3}r_n^A \end{cases} \quad (\text{AI})$$

・・・㉑

㉑の1行目+4行目+5行目+8行目より、

$$p_{n+2}^A + q_{n+2}^B + r_{n+2}^A + s_{n+2}^B = p_n^A + q_n^B + r_n^A + s_n^B$$

が成立する。(1)の結果と合わせて

$$p_n^A + q_n^B + r_n^A + s_n^B = \begin{cases} 0 & (n=1, 3, 5, \dots) \\ 1 & (n=2, 4, 6, \dots) \end{cases}$$

を得る。よって、

[1]  $n$ が奇数のとき

$p_n^A, q_n^B, r_n^A, s_n^B$ はすべて0である。(I 1/2)

[2]  $n$ が偶数のとき

⑨の4行目+5行目より

$$\begin{aligned} q_{n+2}^B + r_{n+2}^A &= p_n^A + \frac{2}{3}q_n^B + \frac{2}{3}r_n^A + s_n^B \\ &= 1 - \frac{1}{3}(q_n^B + r_n^A) \end{aligned} \quad (\text{C } 1/2)$$

$$\therefore (q_{n+2}^B + r_{n+2}^A) - \frac{3}{4} = -\frac{1}{3} \left\{ (q_n^B + r_n^A) - \frac{3}{4} \right\} \quad (\text{J } 1/2)$$

$$\therefore (q_n^B + r_n^A) = \frac{3}{4} + \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n-1}{2}} \cdot \frac{1}{4} \left( \because q_2^B + r_2^A = \frac{1}{3} + \frac{2}{3} = 1 \right) \quad (\text{K } 1/2)$$

である。

また、⑨の2行目+3行目+6行目+7行目より、

$$p_{n+2}^B + q_{n+2}^A + r_{n+2}^B + s_{n+2}^A = p_n^B + q_n^A + r_n^B + s_n^A$$

が成立する。(1)の結果と合わせて

$$p_n^B + q_n^A + r_n^B + s_n^A = \begin{cases} 1 & (n=1, 3, 5, \dots) \\ 0 & (n=2, 4, 6, \dots) \end{cases}$$

を得る。よって、

[1]  $n$ が奇数のとき

⑨の3行目+6行目より

$$\begin{aligned} q_{n+2}^A + r_{n+2}^B &= p_n^B + \frac{2}{3}q_n^A + \frac{2}{3}r_n^B + s_n^A \\ &= 1 - \frac{1}{3}(q_n^A + r_n^B) \end{aligned} \quad (\text{C } 2/2)$$

$$\therefore (q_{n+2}^A + r_{n+2}^B) - \frac{3}{4} = -\frac{1}{3} \left\{ (q_n^A + r_n^B) - \frac{3}{4} \right\} \quad (\text{J } 2/2)$$

$$\therefore (q_n^A + r_n^B) = \frac{3}{4} + \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n-1}{2}} \cdot \frac{1}{4} \left( \because q_1^A + r_1^B = 1 + 0 = 1 \right) \quad (\text{K } 2/2)$$

である。

[2]  $n$ が偶数のとき

$p_n^B, q_n^A, r_n^B, s_n^A$ はすべて0である。(I 2/2)

以上の結果から、求める確率は

(I) 偶奇の場合分けにより8元のうち4元は常に0になる…10点

(各5点×2)

(C) 変数  $q_n^B + r_n^A, q_n^A + r_n^B$  に着目

…5点(完答)

(J) 公比  $-\frac{1}{3}$  の等比数列に帰着

…5点(完答)

(K)  $q_n^B + r_n^A, q_n^A + r_n^B$  についての初期状態を正しく求める

…5点(完答)

$$T_n = q_n^A + q_n^B + r_n^A + r_n^B = \begin{cases} \frac{3}{4} + \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n-1}{2}} \cdot \frac{1}{4} & (n=1, 3, 5, \dots) \\ \frac{3}{4} + \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n}{2}-1} \cdot \frac{1}{4} & (n=2, 4, 6, \dots) \end{cases}$$

となる。

$$(答) T_n = \begin{cases} \frac{3}{4} + \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n-1}{2}} \cdot \frac{1}{4} & (n=1, 3, 5, \dots) \text{ (G 1/2)} \\ \frac{3}{4} + \left(-\frac{1}{3}\right)^{\frac{n}{2}-1} \cdot \frac{1}{4} & (n=2, 4, 6, \dots) \text{ (G 2/2)} \end{cases}$$

(G) 答・・・10点(各5点×2)

2 (60点)

【解答・採点基準】

※特に記載がない限り、導出過程と結論の両方が正しい場合にその配点要素を加点する

$p=7, 11$ について、 $p^4-1$ を計算すると、

$$\begin{aligned} 7^4-1 &= 2400 = 2^5 \cdot 3 \cdot 5^2 \\ 11^4-1 &= 14640 = 2^4 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 61 \end{aligned} \quad (\text{A})$$

となる。したがって、 $7^4-1$ と $11^4-1$ の最大公約数は

$$2^4 \times 3 \times 5 = 240$$

となり、題意の整数は240の約数であることが必要(B)である。次に、7以上の素数 $p$ について、 $p^4-1$ がつねに240の倍数となることを示す。 $p^4-1$ を因数分解すると、

$$\begin{aligned} p^4-1 &= (p^2-1)(p^2+1) \\ &= (p-1)(p+1)(p^2+1) \end{aligned}$$

と変形できる。 $p$ が7以上の素数であるとき、 $p-1, p+1$ は連続する2つの偶数となるから、その積は8の倍数であり、 $p^2+1$ も偶数となることと合わせると、 $p^4-1$ は16の倍数である(C)。また、連続する3整数 $p-1, p, p+1$ のいずれか1つは必ず3の倍数となるが、 $p$ は3の倍数でないため、 $p-1, p+1$ のいずれか片方は必ず3の倍数となる。したがって、 $p^4-1$ は3の倍数である(D)。次に、 $p$ を5で割った余りについて考える。ここで、 $p$ が7以上の素数であることから、 $p$ は適用な整数 $k$ を用いて、

$$p = 5k \pm 1, 5k \pm 2$$

のいずれかの形で表すことができる。このとき、

$$\begin{aligned} p^2 &= 25k^2 \pm 10k + 1, 25k^2 \pm 20k + 4 \quad (\text{複号同順}) \\ \therefore p^2 &= 5(5k^2 \pm 2k) + 1, 5(5k^2 \pm 4k) + 4 \quad (\text{複合同順}) \end{aligned}$$

が成り立つ。したがって、 $p^2$ を5で割った余りは必ず1か4になる。よって、 $p^2-1, p^2+1$ のいずれか片方は必ず5の倍数となり、 $p^4-1$ は5の倍数である(E)。以上より、 $p$ が7以上の素数であるとき、 $p^4-1$ は240の倍数であり、与えられた集合の要素すべてを割り切る最大の整数は240の倍数である。これと、題意の整数が240の約数となることから、求める最大の整数は、

$$240(\text{F}) \quad \dots\dots(\text{答})$$

60点

(A)  $p=7, 11$ の場合など2つの素数の場合について $p^4-1$ を正しく素因数分解ができていて

…10点(各5点×2)

※ $p=7, 11$ でなくても適当な素数の場合で素因数分解を行えていれば可

(B) 求める整数が240の約数であるという必要条件を求めて…10点

(C) を示して…10点

(D) を示して…10点

(E) を示して…10点

(F) 答…10点

※過程に誤りがある場合は与えない

である。



**3 (60点)**

**【解答・採点基準】**

※特に記載がない限り、導出過程と結論の両方が正しい場合にその配点要素を加点する

0以上の実数 $x$ に対し、 $f(x)$ を

$$f(x) = \int_0^x (e^{2t^2} - 4e^{t^2}) dt$$

と定めると、

$$f'(x) = e^{2x^2} - 4e^{x^2} = e^{x^2} (e^{x^2} - 4)$$

となるから、 $f(x)$ の増減は次表のようになる(A)。

$x$	0	...	$\sqrt{2\log 2}$	...
$f'(x)$	/	-	0	+
$f(x)$		□		□

$1.1^2 < 1.38 < 2\log 2 < 1.40 < 1.2^2$ より  $1.1 < \sqrt{2\log 2} < 1.2$ であるから、0以上の整数 $n$ に対して  $f(n)$ を最小にするような $n$ は1か2のいずれかである(B)。そこで、

$$I = f(2) - f(1) = \int_1^2 (e^{2t^2} - 4e^{t^2}) dt$$

とおき、 $I$ の正負を判定する(C)。ここで、 $g(t) = e^{2t^2} - 4e^{t^2}$ とおくと、

$$g'(t) = 4te^{2t^2} - 8te^{t^2}$$

$$\begin{aligned} g''(t) &= 4e^{2t^2} + 16t^2e^{2t^2} - 8e^{t^2} - 16t^2e^{t^2} \\ &= 4e^{t^2} (e^{t^2} + 4t^2e^{t^2} - 2 - 4t^2) \\ &= 4e^{t^2} \{e^{t^2} - 2 + 4t^2(e^{t^2} - 1)\} \end{aligned}$$

となる。 $1 \leq t \leq 2$ のとき  $e^{t^2} \geq e > 2$ であるから、 $g''(t) > 0$ である。

よって、 $y = g(t)$ のグラフは  $1 \leq t \leq 2$ において下に凸であるから、

**60点 (A)(B)(C)(D)(E)(F)(G)**

**(A)  $f(x)$ の増減を調べて・・・5点**

・  $x \neq \sqrt{2\log 2}$ で  $f(x)$ が増加すること

が読み取れれば加点

・  $n$ が整数のまま  $f'(n)$ を計算している場合も加点してよい

・  $y = e^{2t^2} - 4e^{t^2}$ のグラフを描き、 $n \neq 2$ ならば  $f(n)$ は増加することを説明しても可

**(B)  $n=1, 2$ に絞り込んで・・・10点**

**(C)  $\int_1^2 (e^{2t^2} - 4e^{t^2}) dt$ の正負を判定する**

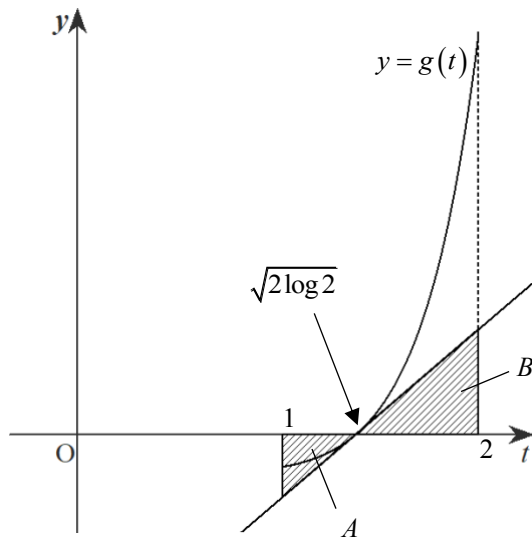
**方針・・・5点**

**(D)  $1 \leq t \leq 2$ において点  $(\sqrt{2\log 2}, 0)$ における  $y = g(t)$ の接線は  $y = g(t)$ の下側にあることを示して・・・10点**

・  $g''(t) > 0$ への言及があれば加点

点 $(\sqrt{2\log 2}, 0)$ における $y = g(t)$ の接線は、 $y = g(t)$ の下側に存在

する(D)。



上図の斜線部の面積をそれぞれ  $A, B$  とおくと、

$$I = \int_1^{\sqrt{2\log 2}} (e^{2t^2} - 4e^{t^2}) dt + \int_{\sqrt{2\log 2}}^2 (e^{2t^2} - 4e^{t^2}) dt$$

$$\ddagger -A + B \text{ (E)}$$

が成立する。このとき、 $A, B$  に対応する三角形は相似であり、その相似比は

$$(\sqrt{2\log 2} - 1) : (2 - \sqrt{2\log 2})$$

である。したがって、 $1.1 < \sqrt{2\log 2} < 1.2$  を用いると  $A < B$  がわかるから、 $I > 0$  である(F)。以上より、 $f(1) < f(2)$  であるから、 $f(n)$  の値を最小にするような  $n$  は  $n = 1$  である。

(答)  $n = 1$  (G)

(E)  $I$  を下から評価して・・・10 点

(F)  $I > 0$  を適切に示して・・・10 点

(G) 答・・・10 点

・  $n = 1$  の予想には加点なし

・ (E)(F) を満足している場合のみ採点

[別解 1]

( $I$  を定義するまでは解答と共通)(A)(B)(C)

1  $\ddagger$   $t$   $\ddagger$  2 のとき

$$e^{2t^2} \ddagger \frac{t}{2} e^{2t^2}$$

$$4e^{t^2} \ddagger 4te^{t^2}$$

が成立するから、

$$I \ddagger \int_1^2 \left( \frac{t}{2} e^{2t^2} - 4te^{t^2} \right) dt \text{ (H)}$$

[別解 1] 60 点 (A)(B)(C)(H)(F)(G)

(A)(B)(C) 共通部分・・・20 点

(H)  $\int_1^2 e^{2t^2} dt$  を下から、 $\int_1^2 e^{t^2} dt$  を上から評価して・・・20 点(各 10 点  $\times$  2)

・ 最終的に  $I > 0$  が示せないと考えられる甘い評価でも、適切に導出され、かつ、数学的に成立していれば加点

$$\begin{aligned}
&= \left[ \frac{1}{8} e^{2t^2} - 2e^{t^2} \right]_1^2 \\
&= \frac{1}{8} e^8 - 2e^4 - \frac{1}{8} e^2 + 2e \\
&= \frac{1}{8} e^4 (e^4 - 16) + \frac{1}{8} e(16 - e)
\end{aligned}$$

$> 0$  (F) ( $\because 2 < e < 16$ )

となる。以上より、 $f(1) < f(2)$ であるから、 $f(n)$ の値を最小にするような $n$ は $n=1$ である。

(答)  $n=1$  (G)

・定積分ではなく、被積分関数の評価に加点しても可

(F)  $I > 0$  を適切に示して・・・10点

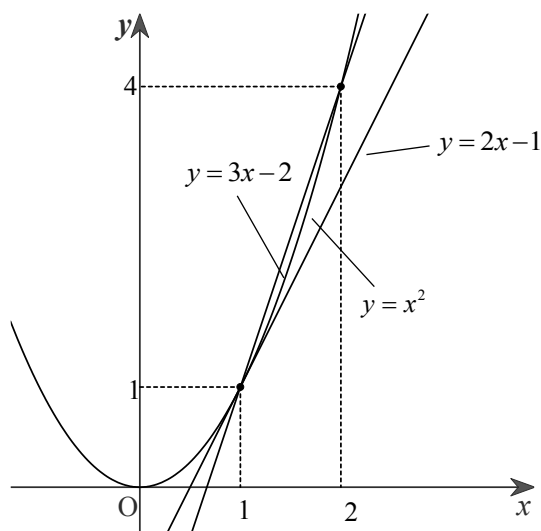
(G) 答・・・10点

・ $n=1$ の予想には加点なし

・(H)(F)を満足している場合のみ採点

[別解 2]

( $I$ を定義するまでは解答と共通)(A)(B)(C)



$y=3x-2$ は2点 $(1,1)$ 、 $(2,4)$ を結ぶ直線、 $y=2x-1$ は点 $(1,1)$ における $y=x^2$ の接線である。このとき、 $y=x^2$ 、 $y=3x-2$ 、 $y=2x-1$ のグラフは上図のような位置関係にある。すなわち、 $1 < t < 2$ のとき、

$$2t-1 < t^2 < 3t-2$$

が成立するから、

$$\begin{aligned}
&e^{2t^2} < e^{4t-2} \\
&4e^{t^2} < 4e^{3t-2}
\end{aligned}$$

である。よって、

$$I < \int_1^2 (e^{4t-2} - 4e^{3t-2}) dt \text{ (H)}$$

[別解 2] 60点 (A)(B)(C)(H)(F)(G)

(A)(B)(C)共通部分・・・20点

(H)  $\int_1^2 e^{2t^2} dt$  を下から、 $\int_1^2 e^{t^2} dt$  を上から評価して・・・20点(各10点×2)

・最終的に $I > 0$ が示せないと考えられる甘い評価でも、適切に導出され、かつ、数学的に成立していれば加点

・定積分ではなく、被積分関数の評価

$$\begin{aligned}
&= \left[ \frac{1}{4} e^{4t-2} - \frac{4}{3} e^{3t-2} \right]_1^2 \\
&= \frac{1}{4} e^6 - \frac{4}{3} e^4 - \frac{1}{4} e^2 + \frac{4}{3} e \\
&= \frac{1}{4} e^4 \left( e^2 - \frac{16}{3} \right) + \frac{1}{4} e \left( \frac{16}{3} - e \right)
\end{aligned}$$

$$> 0 \text{ (F)} \left( \because \frac{4}{\sqrt{3}} < e < \frac{16}{3} \right)$$

となる。以上より、 $f(1) < f(2)$ であるから、 $f(n)$ の値を最小にするような $n$ は $n=1$ である。

(答)  $n=1$  (G)

に加点しても可

(F)  $I > 0$  を適切に示して・・・10点

(G) 答・・・10点

・  $n=1$  の予想には加点なし

・ (H)(F) を満足している場合のみ採点

[別解 3]

( $I$  を定義するまでは解答と共通)(A)(B)(C)

$I$  について  $u = e^{t^2}$  と置換すると、 $1 \leq t \leq 2$  のとき

$$\begin{aligned}
e^{t^2} &= u \\
\Leftrightarrow t^2 &= \log u \\
\Leftrightarrow t &= \sqrt{\log u}
\end{aligned}$$

であるから、 $\frac{dt}{du} = \frac{1}{2u\sqrt{\log u}}$  となり、

$$I = \int_e^{e^4} (u^2 - 4u) \cdot \frac{du}{2u\sqrt{\log u}}$$

$$= \int_e^{e^4} \frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} du \text{ (I)}$$

となる。ここで、 $e \leq u \leq 4$  のとき

$$\begin{aligned}
&\frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} \geq \frac{u-4}{2\sqrt{\log e}} \\
\therefore \frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} &\geq \frac{1}{2}(u-4)
\end{aligned}$$

であり、 $4 \leq u \leq e^4$  のとき

$$\begin{aligned}
&\frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} \geq \frac{u-4}{2\sqrt{\log e^4}} \\
\therefore \frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} &\geq \frac{1}{4}(u-4)
\end{aligned}$$

であるから、

$$I = \int_e^4 \frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} du + \int_4^{e^4} \frac{u-4}{2\sqrt{\log u}} du$$

[別解 3] 60点

(A)(B)(C)(I)(E)(F)(G)

(A)(B)(C) 共通部分・・・20点

(I)  $u = e^{t^2}$  で適切に置換して・・・10点

$$\ddagger \frac{1}{2} \int_e^4 (u-4) du + \frac{1}{4} \int_4^{e^4} (u-4) du \quad (\text{E})$$

$$\begin{aligned} &= \frac{1}{4} \left[ (u-4)^2 \right]_e^4 + \frac{1}{8} \left[ (u-4)^2 \right]_4^{e^4} \\ &= -\frac{1}{4} (4-e)^2 + \frac{1}{8} (e^4-4)^2 \end{aligned}$$

となる。よって、 $2 < e < 4$ であることを用いれば、

$$I \ddagger -\frac{1}{4} (4-2)^2 + \frac{1}{8} (2^4-4)^2 = 17 > 0 \quad (\text{F})$$

である。以上より、 $f(1) < f(2)$ であるから、 $f(n)$ の値を最小にするような $n$ は $n=1$ である。

(答)  $n=1$  (G)

(E)  $I$ を下から評価して・・・10点

(F)  $I > 0$ を適切に示して・・・10点

(G) 答・・・10点

・  $n=1$ の予想には加點なし

・ (E)(F)を満足している場合のみ採點

**4 (60点)**

**【解答・採点基準】**

※特に記載がない限り，導出過程と結論の両方が正しい場合にその配点要素を加点する

$C_1, C_2$  の中心をそれぞれ  $O_1(-2, 0, 0), O_2(2, 0, 0)$  とし， $C_1$  と  $l$  の接点を

$$P(\cos\theta - 2, \sin\theta, 0) \quad (-\pi < \theta \leq \pi) \text{ (A)}$$

とする。 $l$  が  $C_2$  とも接するとき， $C_2$  と  $l$  の接点は

$$x_0^2 + y_0^2 + z_0^2 = 1 \quad \dots \text{①}$$

を満たす実数  $x_0, y_0, z_0$  を用いて， $Q(2+x_0, y_0, z_0)$  (B) と表せる。ここで，直線 PQ が  $C_1, C_2$  に接するための条件は，

$$\begin{cases} \overrightarrow{PQ} \cdot \overrightarrow{O_1P} = 0 \\ \overrightarrow{PQ} \cdot \overrightarrow{O_2Q} = 0 \end{cases} \text{ (C)}$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} (4+x_0 - \cos\theta, y_0 - \sin\theta, z_0) \cdot (\cos\theta, \sin\theta, 0) = 0 \\ (4+x_0 - \cos\theta, y_0 - \sin\theta, z_0) \cdot (x_0, y_0, z_0) = 0 \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} (4+x_0 - \cos\theta)\cos\theta + (y_0 - \sin\theta)\sin\theta = 0 \\ (4+x_0 - \cos\theta)x_0 + (y_0 - \sin\theta)y_0 + z_0^2 = 0 \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} (x_0 + 4)\cos\theta + y_0\sin\theta - 1 = 0 \quad (\because \sin^2\theta + \cos^2\theta = 1) \\ (4 - \cos\theta)x_0 - \sin\theta y_0 + 1 = 0 \quad (\because x_0^2 + y_0^2 + z_0^2 = 1) \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} x_0\cos\theta + y_0\sin\theta = 1 - 4\cos\theta \\ x_0\cos\theta + y_0\sin\theta = 1 + 4x_0 \end{cases}$$

であるから，

$$\begin{aligned} 1 - 4\cos\theta &= 1 + 4x_0 \\ \Leftrightarrow x_0 &= -\cos\theta \text{ (D)} \quad \dots \text{②} \end{aligned}$$

である。また，このとき，

$$y_0\sin\theta = \cos^2\theta - 4\cos\theta + 1$$

が成り立つ。ここで， $\sin\theta = 0$  とすると等式が成り立たないことから  $\sin\theta \neq 0$  であり，両辺を  $\sin\theta$  で割ることで

$$y_0 = \frac{\cos^2\theta - 4\cos\theta + 1}{\sin\theta} \text{ (E)} \quad \dots \text{③}$$

が得られる。 $x_0, y_0$  が②，③を満たすとき①を満たすような  $z_0$  が存在するための条件は，

$$0 \leq z_0^2 \quad \text{かつ} \quad \sin\theta \neq 0$$

**60点**

(A) P の座標をパラメータで表して…5点

(B) Q の座標をパラメータで表して…5点

(C) を求めて…10点  
(各5点×2)

(D)  $x_0$  を求めて…5点

(E)  $y_0$  を求めて…10点

※  $\sin\theta \neq 0$  の確認がない場合は5点

$$\Leftrightarrow 0 \leq 1 - x_0^2 - y_0^2 \text{ (F) かつ } \sin \theta \neq 0$$

$$\Leftrightarrow x_0^2 + y_0^2 \leq 1 \text{ かつ } \sin \theta \neq 0$$

$$\Leftrightarrow \cos^2 \theta + \left( \frac{\cos^2 \theta - 4 \cos \theta + 1}{\sin \theta} \right)^2 \leq 1$$

$$\Leftrightarrow \cos^2 \theta + \frac{(\cos^2 \theta - 4 \cos \theta + 1)^2}{1 - \cos^2 \theta} \leq 1$$

$$\Leftrightarrow \cos^2 \theta (1 - \cos^2 \theta) + (\cos^2 \theta - 4 \cos \theta + 1)^2 \leq 1 - \cos^2 \theta (\because 1 - \cos^2 \theta > 0)$$

$$\Leftrightarrow \cos^2 \theta - \cos^4 \theta + \cos^4 \theta - 8 \cos^3 \theta + 16 \cos^2 \theta - 8 \cos \theta + 2 \cos^2 \theta + \cos^2 \theta \leq 0$$

$$\Leftrightarrow 2 \cos^3 \theta - 5 \cos^2 \theta + 2 \cos \theta \geq 0$$

$$\Leftrightarrow \cos \theta (1 - 2 \cos \theta) (2 - \cos \theta) \geq 0$$

$$\Leftrightarrow \cos \theta (1 - 2 \cos \theta) \geq 0 (\because 2 - \cos \theta > 0)$$

$$\Leftrightarrow 0 \leq \cos \theta \leq \frac{1}{2}$$

$$\therefore -\frac{\pi}{2} \leq \theta \leq -\frac{\pi}{3}, \frac{\pi}{3} \leq \theta \leq \frac{\pi}{2} \text{ (G) } \quad \dots(\text{答})$$

となり、これが $\theta$ の取りうる値の範囲である。このとき、 $z_0$ は、

$$\begin{aligned} z_0 &= \pm \sqrt{1 - x_0^2 - y_0^2} \\ &= \pm \sqrt{\sin^2 \theta - \left( \frac{\cos^2 \theta - 4 \cos \theta + 1}{\sin \theta} \right)^2} \\ &= \pm \frac{1}{\sin \theta} \sqrt{\sin^4 \theta - (\cos^2 \theta - 4 \cos \theta + 1)^2} \\ &= \pm \frac{1}{\sin \theta} \sqrt{(1 - \cos^2 \theta)^2 - (\cos^4 \theta - 8 \cos^3 \theta + 16 \cos^2 \theta - 8 \cos \theta + 1 + 2 \cos^2 \theta)} \\ &= \pm \frac{1}{\sin \theta} \sqrt{-2 \cos^2 \theta + 8 \cos^3 \theta - 18 \cos^2 \theta + 8 \cos \theta} \\ &= \pm \frac{2}{\sin \theta} \sqrt{\cos \theta (1 - 2 \cos \theta) (2 - \cos \theta)} \text{ (H)} \end{aligned}$$

となるから、 $C_2$ と $\ell$ の接点となりうる点の座標は、

$$\begin{aligned} &(x_0 + 2, y_0, z_0) \\ &= \left( -\cos \theta + 2, \frac{\cos^2 \theta - 4 \cos \theta + 1}{\sin \theta}, \pm \frac{2}{\sin \theta} \sqrt{\cos \theta (1 - 2 \cos \theta) (2 - \cos \theta)} \right) \end{aligned}$$

(I) …(答)

である。

(F) がわかっていて

…10点

(G)  $\theta$ の範囲を求め

て…5点 (完答)

(H)  $z_0$ を求めて

…5点

(I) 答…5点 (完答)

-  $x$ 座標の+2を忘れないように注意

**5 (60点)**

**【解答・採点基準】**

※特に記載がない限り、導出過程と結論の両方が正しい場合にその配点要素を加点する

(1)

$Y$  は点  $P$  と直線  $x-y=0$  の距離に等しいため、

$$Y = \frac{|t-t\cos t|}{\sqrt{2}} = \frac{t-t\cos t}{\sqrt{2}}$$

である。また、 $\triangle OPQ$  に三平方の定理を用いると、

$$\begin{aligned} X &= \sqrt{(t^2+t^2\cos^2 t) - \frac{(t-t\cos t)^2}{2}} \\ &= \sqrt{\frac{(t+t\cos t)^2}{2}} \\ &= \frac{t+t\cos t}{\sqrt{2}} \end{aligned}$$

である。

(答)  $X = \frac{t+t\cos t}{\sqrt{2}}, Y = \frac{t-t\cos t}{\sqrt{2}}$  (A)

(1) 10点 (A)

(A) 答・・・10点 (各5点×2)

・導出過程は不問

・  $X = \frac{|t+t\cos t|}{\sqrt{2}}, Y = \frac{|t-t\cos t|}{\sqrt{2}}$  のよう

に絶対値を外していない場合も加点

(2)

$$\frac{dX}{dt} = \frac{1}{\sqrt{2}}(1+\cos t - t\sin t)$$

より  $t = (2n+1)\pi$  (A) は  $\frac{dX}{dt} = 0$  の解の1つであり、

$2n\pi < t < (2n+2)\pi, t \neq (2n+1)\pi$  のとき

$$\begin{aligned} \frac{dX}{dt} &= 0 \\ \Leftrightarrow t\sin t - 1 - \cos t &= 0 \\ \Leftrightarrow t - \frac{1+\cos t}{\sin t} &= 0 (\because \sin t \neq 0) \end{aligned}$$

となる。ここで、 $2n\pi < t < (2n+2)\pi, t \neq (2n+1)\pi$  を定義域とする関数  $f(t)$  を

$$f(t) = t - \frac{1+\cos t}{\sin t} \quad (B)$$

と定めると、

(2) 25点 (A)(B)(C)(D)(E)

(A)  $t = (2n+1)\pi$  が解であることを示して・・・5点

(B)  $f(t) = t - \frac{1+\cos t}{\sin t}$  について調べる

方針・・・5点



$$\begin{aligned}
 f'(t) &= 1 - \frac{-\sin^2 t - (1 + \cos t) \cos t}{\sin^2 t} \\
 &= \frac{-\cos^2 t + \cos t + 2}{\sin^2 t} \\
 &= \frac{(2 - \cos t)(1 + \cos t)}{\sin^2 t} > 0
 \end{aligned}$$

であるから、 $2n\pi < t < (2n+1)\pi$ ,  $(2n+1)\pi < t < (2n+2)\pi$  のそれぞれにおいて  $f(t)$  は単調に増加する (C)。また、

$$\lim_{t \rightarrow 2n\pi+0} f(t) = -\infty \quad (\text{D } 1/2)$$

$$\begin{aligned}
 \lim_{t \rightarrow (2n+1)\pi} f(t) &= \lim_{t \rightarrow (2n+1)\pi} \left\{ t - \frac{(1 - \cos t)(1 + \cos t)}{(1 - \cos t) \sin t} \right\} \\
 &= \lim_{t \rightarrow (2n+1)\pi} \left( t - \frac{\sin t}{1 - \cos t} \right) \\
 &= (2n+1)\pi \quad (\text{D } 2/2) \quad (> 0)
 \end{aligned}$$

より、 $f(t) = 0$  となるような  $t$  は  $2n\pi < t < (2n+1)\pi$  の範囲にただ1つ存在する (E)。以上より、題意は示された。

(証明終)

(C)  $f(t)$  は単調に増加する…5点

・区間への言及がない場合でも加點

(D) 極限値を求めて…5点(完答)

・中間値の定理で解の存在を示すために必要な極限値をすべて求めている場合のみ加點

(E) もう1つの解の存在を示して…5点

・(C)(D)の両方を満足する場合に加點

・(C)(D)のいずれかに不備があれば加點なし

(2)[別解]

$$\frac{dX}{dt} = \frac{1}{\sqrt{2}}(1 + \cos t - t \sin t)$$

$$\frac{d^2 X}{dt^2} = \frac{1}{\sqrt{2}}(-2 \sin t - t \cos t)$$

となる。よって、 $2n\pi < t < (2n+2)\pi$ ,  $t \neq \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi, \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$  のとき

$$\frac{d^2 X}{dt^2} = -\frac{1}{\sqrt{2}}(t + 2 \tan t) \cos t$$

となる。ここで、 $g(t) = t + 2 \tan t$  (F)とおくと、 $g'(t) = 1 + \frac{2}{\cos^2 t} > 0$

より、 $2n\pi < t < \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi$ ,  $\left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi < t < \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$ ,

$\left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi < t < (2n+2)\pi$  のそれぞれにおいて  $g(t)$  は単調に増加す

る。さらに、

$$g(2n\pi) = 2n\pi \neq 0$$

(2)[別解] 25点 (F)(G)(H)(I)

(F)  $g(t) = t + 2 \tan t$  について調べる方針…5点

・ $t \neq \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi, \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$  の言及がない場合でも加點してよい、減點も不要

$$\lim_{t \rightarrow \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi \pm 0} g(t) = \mp \infty \quad (\text{複号同順})$$

$$\lim_{t \rightarrow \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi \pm 0} g(t) = \mp \infty \quad (\text{複号同順})$$

$$g((2n+2)\pi) = (2n+2)\pi > 0$$

より、 $g(t) = 0$  を満たすような  $t$  は  $\left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi < t < \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$ ,

$\left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi < t < (2n+2)\pi$  の範囲に1つずつ存在し、それぞれ  $\beta, \gamma$  と

おく。このとき、 $\frac{dX}{dt}$  の増減は下表のようになる(G)。

$t$	$2n\pi$	...	$\left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi$	...	$\beta$	...
$g(t)$	/	+	/	-	0	+
$\cos t$	/	+	0	-		-
$\frac{d^2 X}{dt^2}$	/	-		-	0	+
$\frac{dX}{dt}$	$(\sqrt{2})$	□		□		□

$t$	$\left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$	...	$\gamma$	...	$(2n+2)\pi$
$g(t)$	/	-	0	+	/
$\cos t$	0	+		+	/
$\frac{d^2 X}{dt^2}$		+	0	-	/
$\frac{dX}{dt}$		□		□	$(\sqrt{2})$

ここで、 $t = \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi$  のとき

$$\frac{dX}{dt} = \frac{1}{\sqrt{2}} \left\{ 1 - \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi \right\} \quad (\text{H } 1/2) < 0$$

(G)  $\frac{dX}{dt}$  の増減を調べて・・・5点

- $g(t)$  の符号変化は  $y = 2 \tan t$  と  $y = -t$  のグラフから考察しても可
- 多少の不備があっても、区間  $[2n\pi, \beta]$  で減少， $[\beta, \gamma]$  で増加， $[\gamma, (2n+2)\pi]$  で減少することに言及があれば加算

(H)  $\frac{dX}{dt}$  の値を求めて・・・5点(完答)

- 中間値の定理で解の存在を示すために必要な値をすべて求めている場

であり、 $t = \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$  のとき

$$\frac{dX}{dt} = \frac{1}{\sqrt{2}} \left\{ 1 + \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi \right\} \quad (\text{H } 2/2) > 0$$

である。以上より、 $\frac{dX}{dt} = 0$  の解は  $2n\pi < t < \left(2n + \frac{1}{2}\right)\pi$ ,

$\beta < t < \left(2n + \frac{3}{2}\right)\pi$  の範囲にそれぞれ1つずつ存在する (I) ため、題意

は示された。

(証明終)

合のみ加

(I) 2つの解の存在を示して

・ 10点 (各5点×2)

・ (C)(D)の両方を満足する場合に加  
点

・ (C)(D)のいずれかに不備があれば  
加

点なし  
・  $t = (2n+1)\pi$  が解であることに言及  
がある場合、導出過程によらず 5 点  
加

(3)

$t \neq (2n+1)\pi$  のとき

$$\frac{dX}{dt} = -\frac{1}{\sqrt{2}} f(t) \sin t$$

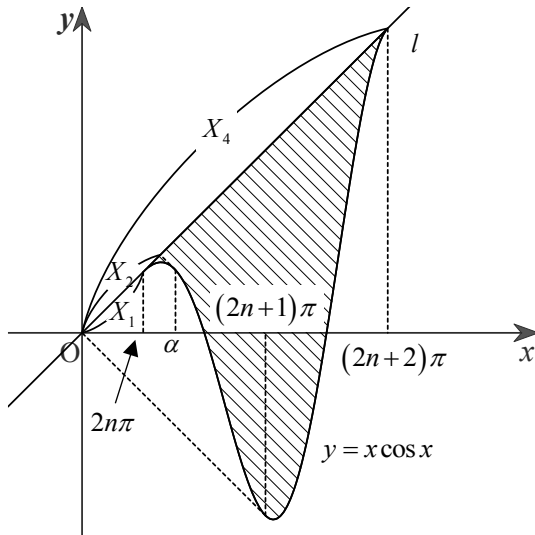
より、 $\frac{dX}{dt} = 0$  の解のうち  $t = (2n+1)\pi$  でない方を  $\alpha$  とおくと、 $X$  の

増減は下表のようになる。

$t$	$2n\pi$	...	$\alpha$	...	$(2n+1)\pi$	...	$(2n+2)\pi$
$f(t)$	/	-	0	+	/	+	/
$\sin t$		+		+	0	-	
$\frac{dX}{dt}$	/	+	0	-	0	+	/
$X$	$X_1$	□	$X_2$	□	$X_3 (=0)$	□	$X_4$

ただし、 $t = 2n\pi, \alpha, (2n+1)\pi, (2n+2)\pi$  のときの  $X$  の値をそれぞれ  $X_1, X_2, X_3, X_4$  とおいた。このとき、 $V_n$  は下図の斜線部を  $l$  のまわりに1回転させてできる回転体の体積である。

(3) 25点 (A)(B)(C)(D)(E)



$2n\pi + t + \alpha$ ,  $\alpha + t + (2n+1)\pi$ ,  $(2n+1)\pi + t + (2n+2)\pi$ での $Y$ をそれぞれ $Y_1, Y_2, Y_3$ とおくと,

$$V_n = \pi \int_{X_1}^{X_2} (Y_1)^2 dX - \pi \int_{X_3}^{X_2} (Y_2)^2 dX + \pi \int_{X_3}^{X_4} (Y_3)^2 dX \quad (\text{A})$$

$$= \pi \int_{2n\pi}^{\alpha} Y^2 \frac{dX}{dt} dt - \pi \int_{(2n+1)\pi}^{\alpha} Y^2 \frac{dX}{dt} dt + \pi \int_{(2n+1)\pi}^{(2n+2)\pi} Y^2 \frac{dX}{dt} dt$$

$$= \pi \int_{2n\pi}^{(2n+2)\pi} Y^2 \frac{dX}{dt} dt$$

$$= \pi \int_{2n\pi}^{(2n+2)\pi} \frac{t^2 (1 - \cos t)^2}{2} \cdot \frac{(1 + \cos t - t \sin t)}{\sqrt{2}} dt \quad (\text{B})$$

となる。ここで、 $u = t - 2n\pi$ と置換すると、

$$V_n = \frac{\pi}{2\sqrt{2}} \int_0^{2\pi} (u + 2n\pi)^2 (1 - \cos u)^2 \{1 + \cos u - (u + 2n\pi) \sin u\} du \quad (\text{C})$$

となる。このとき、被積分関数は $n$ について3次以下の整式であるから、 $V_n$ も $n$ について3次以下の整式である(D)。  $V_n$ の $n^3$ の係数を計算すると

$$\frac{\pi}{2\sqrt{2}} \int_0^{2\pi} (2\pi)^2 (1 - \cos u)^2 (-2\pi \sin u) du \quad (\text{E 1/2})$$

$$= -2\sqrt{2}\pi^4 \int_0^{2\pi} (1 - \cos u)^2 \sin u du$$

$$= -2\sqrt{2}\pi^4 \left[ \frac{1}{3} (1 - \cos u)^3 \right]_0^{2\pi}$$

$$= 0 \quad (\text{E 2/2})$$

となるから、題意は示された。

(A)  $V_n$ を適切に立式して…5点

・多少の不備があっても、曲線の折り返しを考慮し3つの部分に分けて立式したことが読み取れば加

点  
・ $X$ の増減表など折り返しの存在に関する説明の有無は不問

(B)  $V_n$ を $t$ の積分で表して…5点

・(A)を満足していない場合でも加  
点、以降も採点対象

(C)  $u = t - 2n\pi$ で適切に置換して…5  
点

・ $u = t - (2n+1)\pi$ でも可

(D)  $V_n$ の次数が3次以下である…5点

・「 $V_n$ の次数が3次である」なども可

(E)  $V_n$ の $n^3$ の係数を適切に立式し、

0 になることを適切に示して…5 点

(完答)

・立式の際,  $\frac{\pi}{2\sqrt{2}}$  などの定数は省略

可

(証明終)